

ドイツ文化の香りが残る町 大麻

サブテーマ「なぜ鳴門市とドイツの交流が今でも続いているのか」

[仮説] 収容所で結ばれた鳴門とドイツの交流をその後も大切に受け継いできた人がいるのではないかな。

[班員] 川本 ・ 榎 ・ 坂本 ・ 板東 ・ 福瀧 ・ 細島
川原 ・ 高木 ・ 堤 ・ 村上 ・ 宮内 ・ 宮崎



★板東俘虜収容所★ 第一次世界大戦期、鳴門市大麻町桧に開かれた俘虜収容所で、ドイツ軍 4715 名のうち、約 1000 名を、1917 年から 1920 年まで収容していました。収容所跡は 2018 年度に国の史跡に指定され、現在はドイツ村公園として整備されています。



めがね橋（大麻比古神社内）

★俘虜となった人々の生活★ 所長である松江豊寿中佐をはじめとした管理スタッフが、ドイツ兵の人権を尊重して、できる限りの自主的な生活が許可されていました。もともとやっていた職業を生かし、所内にさまざまな店を開く人もいました。印刷所もあり、収容所内で使う紙幣や切手、「デイ・バラック」という新聞も発行されました。



ドイツ橋（大麻比古神社内）

一方で、俘虜となった人々が地元の人たちに先進的な技術指導を行うこともあり、洋菓子、パンなどの作り方や西洋野菜の栽培、放畜、建築、設計などの技術が伝えられました。

ドイツ兵たちが、遠い祖国をしのびながら 1 日も早く故国に帰れることを願いつつ大麻比古神社内を散策し、記念に境内に池を掘ってめがね橋とドイツ橋をかけました。

★文化・スポーツ活動と地元の人々との交流★ ドイツ人俘虜の人々は文化・スポーツ活動も盛んに行いました。彼らがしているスポーツを近くの住民が観戦することもありました。また近隣の体育教師や生徒が体操の見学に訪れ指導をうけたこともありました。遠足や水泳大会なども含め様々な機会を通して地元の人たちと接することで、互いの交流を深めてきました。文化活動でも音楽会・展覧会などが開催されています。1918 年に開催された板東俘虜収容所俘虜製作品展覧会（美術工芸展覧会）には、12 日間で 5 万人もの人が当時の先進国ドイツの優れた技術や文化を一目見ようと訪れました。音楽活動では、楽団や合唱団が、定期的に演奏会を開き、その回数は 100 回を超えました。戦時中でありながらも、地元の人たちの「人を尊重する心」と、長年培われてきた「お接待の心」が交流を支えました。

★ドイツ人俘虜たちの慰霊碑★ 第一次世界大戦は 1919 年 6 月末に終結しました。8 月 31 日、ドイツ兵たちはなくなった 11 名の戦友をとむらうための慰霊碑を所内の池の畔に建設しました。

1920年4月に板東俘虜収容所は閉所され、慰霊碑も草に覆われ、収容所の存在とともに長く忘れられていました。第二次世界大戦後に収容所跡地に移り住んだ高橋春枝さんによって「ドイツ兵の慰霊碑」が発見されました。生活に必要な薪をとるために裏山を散策していると、雑草の影に碑があるのに気づきました。その後、春枝さんは定期的に清掃を続け、地元の人たちとの保護活動が新聞で紹介され、これを知ったドイツの駐日大使が、1960年に収容所跡地を訪れたことがきっかけで、元ドイツ兵俘虜と板東の人たちとの交流が再び始まることになりました。



★鳴門市とドイツ、リュネブルク市との姉妹都市から現在へ★

1972年、旧のドイツ館が建設され、1974年には鳴門市とドイツ・リュネブルク市との間で姉妹都市盟約が締結されました。それ以来、両市は相互に親善訪問団を派遣するなど、国際交流を活発に展開するようになりました。鳴門市では、ドイツ村公園の建設を始め、ドイツと共同でドイツ兵士合同慰霊碑(1976年)やばんどうの鐘(1983年)などを建立し、1993年には新しい現在のドイツ館が完成しました。



★ドイツ兵士合同慰霊碑★

全国の収容所で亡くなった87人のドイツ兵俘虜のための合同慰霊

★現在のドイツ館★

ドイツ兵の暮らしや板東の人々との交流の様子を後の世に伝えドイツとの国際交流を深める目的でつくられました。



★道の駅「第九の里」★

ドイツ館のすぐ近くに、道の駅「第九の里」があります。この建物は板東俘虜収容所の建物を移築したものです。ドイツのコーナーやドイツにちなんだ食事が味わえる軽食コーナーがあります。



★鳴門市「第九」は12月ではなく6月開催

ベートーヴェン作曲の交響曲第9番は「第九」の呼び名で多くの人々に親しまれ、年末の12月になると日本各地で演奏会が開かれていますが、鳴門市では毎年6月に「第九」の演奏会が開かれています。1918年6月1日に、板東俘虜収容所内バラック第1棟の講堂で、徳島オーケストラがベートーヴェンの交響曲第九番を男性ばかりの合唱付きで演奏しました。これは全楽章演奏の日本初演であり、アジアで最も古い演奏記録です。第4楽章で歌われるシラーの詩には「優しい翼が留まるところ、すべての人間は兄弟になる」とあります。板東俘虜収容所で演奏されるにふさわしい交響曲だと思われます。



ドイツ館前の広場にはベートーヴェンの像が建っています。1997年鳴門市制50周年を記念し制作されました。第九演奏会記念陶板も設置されています。

鳴門市は6月1日を「第九の日」と定め、6月の第1日曜日に、県内外からたくさんの合唱団員が合流して国際色豊かに第九のふるさと鳴門ならではの演奏会を開催し、板東俘虜収容所が育んだ人類友愛の精神を世界に発信し続けています。

★ドイツのパンの味を受けつぐドイツ軒★ 昭和12年創業の老舗のパン屋さんです。鳴門市



<ミルヒコルンブロード>

撫養町にあります。ドイツ兵からパン作りを教わった藤田只ノ助に弟子入りしたのが、初代店主でした。ライ麦を使ったドイツパンは酸味が強いため、日本人向けに工夫したパンを作っているそうです。

★調べ学習を終えて★

※「第九」の公演を開催した板東俘虜収容所の人々の心情を想像してみました！

- ・ドイツに帰れるという、うれしい気持ちと、もう帰らなければならないという、さびしい気持ちがあったのではないかと思います。所長さんや地域の人々に感謝の気持ちをこめて演奏したのだと思う。
- ・「第九」の歌詞には平和への切なる祈りが書かれている。その中でも「あなたの穏やかで柔らかな翼のもとに全ての人々が兄弟となる 偉大な成功を成し遂げた者よ」という歌詞がある。私は厳しい状況にいたドイツ兵士や温かく迎えてくれた板東の人たちに、幸福を祈る思いがあったのではないかと思います。

※板東俘虜収容所ができて100年以上たった今でも、鳴門市とドイツとの交流が続いている理由は？

- ・当時の出来事を今に残す「ドイツ館」があるから。
- ・慰霊碑の保存活動に高橋さんをはじめ板東の人たちが関わり、そのことがドイツの関係者に伝わったことが大きな力になったと思う。
- ・戦争中でも人を思いやる心、信じる心をもっていられたから、100年以上のきずなを生み出した。

※調べ学習を通して、新しい発見は？

- ・ドイツの味を受け継いだパン屋が鳴門市にあることを知った。
- ・100年以上たってもドイツとの交流が続いている理由がわかった。
- ・「第九」の歌詞には、深い意味がこめられていることを知った。
- ・鳴門市には誇ることができる深い歴史があるということを知った。
- ・当時の板東の人たちは、苦しい時でも人を信頼することを忘れず、心優しい。そのことを誇りに思う。

道の駅「第九の里」
鳴門市大麻町松

ドイツ館
鳴門市大麻町松

ドイツ兵慰霊碑
鳴門市大麻町松

ドイツ村公園
(旧ドイツ人俘虜収容所跡)
鳴門市大麻町松



ドイツ軒
鳴門市撫養町南浜東浜 674